ふみの会ニュース

■発　行　ふみの会広報部
■発行日　2008 年 10 月 11 日
■連絡先　藤川博樹
〒 115-0045 北区赤羽 1-48-3-203
有限会社マイクロデザイン内
tel03-5249-5797 fax03-3901-6090
■編 集　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直
http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html

No.319

10 月行事日程

■ニュース編集
原稿はテキストにして下記へ
ワード・一太郎文書も可
kamo@sun.email.ne.jp
エッセイ：5 枚（2000 字）
小説：10 枚（4000 字）目安

■締め切り
2008 年 10 月 20 日（月）

■購読料・年会費
1200 円（年）
郵便振替：
00170-1-18290 ふみの会
郵送料カンパお願いします

高知県四万十市（旧中村市）内の幸徳秋水の墓（2008/09/13）

◆高知県四万十市に行ってきました。主な目的は友人訪問と四万十川の川下りでしたが、そのついでに市内の幸徳秋水の墓に詣でてきました。墓地は路地の奥の崖下にあり、案内図がなければとてもたどり着けません。「国賊」にされてしまった人物の墓を守ってきた人々の苦労が偲ばれる状態でした。犬の散歩をさせていた老人と私とで幸徳をめぐって険悪な口論になるというハプニングもありました。その後仲直りしましたけど。（直）

◆かつて10年コンビを組んで働いた相棒が49歳で癌死した。A氏は膵臓癌でこの2月の終りに手術したのだが、以降7ヶ月保たなかったということになる。氏の妻は6年前にスキルス胃癌で亡くなっている。両親がこの世を去り、ふたりの娘が残された。この春、社会人になったばかりの長女と、まだ大学生の次女。親たちの心残りはいかばかりだったか、と思うとたまらない。葬儀のおわりに、振り絞るような長女のあいさつがあり、「……大好きだったお母さんのところにいっていることでしょう」というくだりでは数多い参列者のなかに泣かないひとがいないほどだった。ふりかえれば、手術では治らない癌があるということは確かだ。というより、発見された時点で多くの肉体はすでに回復不能になっている、ということだろう。◆地籍調査の結果、かたちとして九州の実家は町道への出入り口を法的に失った。その出入り口の地権者はこちらの申し出を聞き入れないので、法的にはその他人の土地を「好意」によって利用させてもらっているということになる。その宙ぶらりんの状態に解決の道が開けてきた。現在の出入り口の奥に広大な土地を所有するS切り餅株式会社が、町道への出入り口分の土地を時価で譲ってくれるという。じつはそこには死んだ父が勝手に物置きを建てていた。先頃わたしが解体し、土地をならしている。S切り餅株式会社のKさんはそのへんもひとわたり視察、母とも面会して事情を汲み取ってくれたらしい。このところずっと頭を悩ましていた問題だったが、展望が開けてほっとしている。（雅）

●菊池恩恵様　郵送料切手カンパありがとうございました。
●中井書店・中井豊氏から「句集　苦艾」「阪南文芸第十六号」をご寄贈いただきました。ありがとうございました。

ヤマダさんとポンキチ（2）

多田雅子

（四）春の訪れ

その一　ポンキチ

里では、梅の花が、ほつほつと咲き始めて、ほのかな香りを風のまにまに漂わせています。林の中でも、そこかしこで、小さな生き物たちが、蠢く気配が感じられますが、夕方になると、辺り一帯、静まり返り、百舌鳥の甲高い鳴き声だけが、天を引き裂くように響きわたっています。

「びっくりさせやがる」

ポンキチは、眠い目をこすりながら、岩穴から顔を出して、腹立たしそうに木々を見上げました。

「まったく、迷惑なやつだ」

昨夜から何も食べていないポンキチには、百舌鳥の刺すような声は、キリキリとお腹にこたえるのです。

すっかり日が落ちるのを待って、ポンキチは、岩穴を出て、水の音がする方へ歩いて行きました。

水は、川床の石を縫うように流れ、大きな石にぶつかると、ガラスの破片のような水しぶきを上げて光っています。

ポンキチは、慣れた足どりで川床に降りると、流れに鼻づらを突っ込み、チャピチャピ飲み始めました。

冷たい水が身体の隅々まで沁み込んで生き返るようです。

「ふうーっ」

ポンキチは、ひと息つくと、丘を下り、里を抜けて、隣村へ続く道を歩き始めました。いつだったか、家々の門に松飾りがまだ飾ってあるころ、食べ物を探しに隣村まで行った時、村の入り口に立っているお地蔵様の前に、お菓子や果物がたくさん供えられていたのを思い出したのでした。

月明かりに照らされた畑の中の一本道を通って、小さな石の橋を渡ると、そこが隣村で、お地蔵様は、すぐ左に折れた所に、川を背にして立っています。三日月のように垂れ下がった目は、笑っているようにも泣いているようにも見えて、見ていると、不思議な気持ちになります。

ポンキチは、お地蔵様から少し離れた松の木の後ろに隠れて、しばらく様子を窺うことにしました。

お地蔵様の足元の竹筒には花が生けられ、その前には、餅やミカン、袋に入ったお菓子が山盛り盛ってあるのが見えます。

ポンキチは、周りに人影のないことを確かめると、そろりそろりとお地蔵様に近づいて行きました。

と、その時です。反対側の暗闇の中から、一匹の犬が、クンクンにおいをかぎながら歩いて来ました。大きな茶色い犬で、お腹を空かせて、食べ物を探しているように見えます。ポンキチはぎょっとして、慌てて松の木の後ろに戻りました。

犬は、お地蔵様の前で立ち止まり、しばらく周辺の臭いをかぎ回っていましたが、お菓子に気づくと、鋭い歯で袋を食いちぎり始めました。牙のような鋭い歯が、ポンキチの所からも見えます。

「危ない、危ない。もう少しで、やられるところだった」

ポンキチは、息をひそめて、犬が立ち去るのを待ちました。

犬は、お菓子の袋を二、三個破って、食るように食い尽くすと、また、クンクン臭いをかぎながら、どこかへ行ってしまいました。

ポンキチは、犬の姿が見えなくなると、お地蔵様に近づき、犬が食い散らした後の食べ物やミカンを食べました。

満腹になると、ポンキチは、もと来た道を帰って行きました。久し振りによく食べたので、気分がウキウキしています。

しばらく歩いて、ふと後ろを振り向くと、自転車がライトを付けて、走って来るのが見えました。ポンキチは、畑に隠れて、自転車が通り過ぎるのを待つことにしました。

と、よく見ると、乗っているのは、いつかのあの男です。

「あいつだ。ちょっと驚かせてやれ」

ポンキチはいたずらを思い立ちました。

その二　ヤマダさん

畑の中の一本道を、ヤマダさんは、白い息を吐きながら自転車を走らせています。昼過ぎから隣村の友人の家で碁を打っていて、今、その帰りなのです。

「つい夢中になって、遅くなってしまった」

東の空に張り付いた氷のような月をちらっと見て、ヤマダさんは、ペダルを踏む足に力を入れました。風がピュウピュウ頬を切っていくようです。

「大さむっ」

ヤマダさんが身体をブルッと震わせた時、自転車の前を、コロコロところが

って行く物があることに気がつきました。

「はて、何だろう」

追いかけるように自転車を走らせると、その丸い物は、突然、止まり、次の瞬間、タヌキの姿に変わりました。

「うわーっ」

ヤマダさんは、びっくりして、慌ててブレーキを握りしめました。

ギイーーーッ

自転車は、つんざくような音を立てつんのめり、その勢いで、畑の中に放り出されてしまいました。

「あいたたた」

自転車と一緒に倒れてしまったヤマダさんは、なかなか立ち上がることができません。どうやら足をくじいてしまったようです。

ヤマダさんは、しばらく、そのままうずくまっていましたが、やがて、やっとの思いで立ち上がると、自転車を起こし、道に戻って、少しずつ足を引き摺りながら歩き始めました。

「タヌキのやつめ、今度見つけたら、こらしめてやる」

ヤマダさんは腹が立って仕方ありません。

と、後ろに、何かがいるような気配がします。不思議に思って振り返ってみると、さっきのタヌキがついて来ています。

「こらっ」

ヤマダさんは、立ち止まって怒鳴りつけました。けれど、タヌキは、立ち止まるだけで逃げようとしません。ヤマダさんは、何度も振り返っては怒鳴り続けましたが、タヌキは、その度に、立ち止まって、首をかしげるような仕草をするだけです。

「おかしなやつだ」

ヤマダさんは、だんだん可笑しくなってきました。そして、そうやって歩いているうちに、タヌキと一緒に散歩をしているような気分になってきました。お月様に照らされた二つの影が、ゆっくりゆっくり畑の中の一本道を進んでいきます。

お月様が真上に掛かるころ、二つの影はようやく村の入り口にたどり着きました。ほっとしてヤマダさんが振り返ってみると、タヌキは、いつのまにかいなくなっていました。

「あいつ、おれのことが心配だったのかな」

ヤマダさんは、ふと、そんなことを思いました。

翌日、ヤマダさんの足の腫れは、ひどくなっていました。

「気の毒に。そんな悪さをするタヌキは、とっつかまえてひどい目に合わせてやらねばならんのう」

ヤマダさんの話を聞いた隣のおじいさんは言いました

「用事があったら、遠慮のう、何でも言うて下さい」

おばあさんはそう言って、おかずを作って持って来てくれます。他の村人たちも、ヤマダさんの家の前を通るたびに、

「具合はどうですか」

と、声をかけていきます。

ヤマダさんは、村人たちのやさしさをとても有り難く思いました。

ある日のこと、近所の農夫がやって来て、

「近頃、頻繁に、山からタヌキが降りてきて、ゴミ箱を漁ったり、庭木を荒らしたりして困ってるんですよ。それで、わなを仕掛けてつかまえてやろうと、皆で相談しているところです。タヌキ汁で宴会というのも悪くないですよ。ハッハッハッ」

と、愉快そうに言いました。

ヤマダさんもつられて笑いましたが、この間のタヌキが頭に浮んで、

「タヌキ汁か」

と、かわいそうな気持ちにもなりました。

その三　春の訪れ

明るく澄んだ陽射しが眩しいある日のこと、ヤマダさんが、縁側に腰かけて日向ぼっこをしていると、突然、犬の鳴き声がして、タヌキが一匹、走り込んできました。そのすぐ後ろを、大きな犬が、吠えながら追いかけて来ます。

ヤマダさんは、咄嗟に、裸足で庭に降りると、戸袋に立てかけてあったほうきを手に取って、ブルンブルン振り回しました。犬は、後ずさりしながらも、唸りながら歯向かってきましたが、すぐに諦めて、どこかへ行ってしまいました。

「いたずらだぬきも困ったものだが、弱いものいじめはよくない」

ヤマダさんは、独り言を言いながら、手に持っていたほうきを元の所に戻しました。そして、思い出したように、

「足のけがのことをすっかり忘れておった」

と、縁側に座りなおして、足をさすり始めました。

と、ガサガサ音がして、庭の植え込みから、隠れていたタヌキが姿を現しました。タヌキは逃げもせず、心配そうに首をかしげて、ヤマダさんの足を眺めています。

「安心しろ。大丈夫だ」

ヤマダさんは、そう言うと、

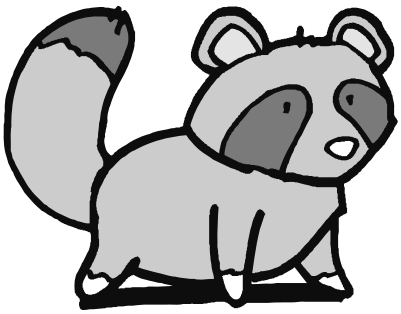
「それにしても、おまえも、大変だな。暖かくなったら、また、野菜や果物を作

るから、そしたら、おまえにも少しは分けてやるよ」

と、言葉を続けました。すると、タヌキは、キュンと頷いて、嬉しそうにしっぽを振ると、跳ねるように山へ帰って行きました。

仏壇の中では、風もないのに花が揺れ、亡くなった奥さんがニッコリ微笑んでいました。

（完）



ヤマンバ修行 ⑨

蒲原ユミ子

「家で応急処置をするから、おれにおぶされ」

里枝はそうっと動き、七実も手伝ってくれたのでヤマンバの背におぶさることができた。ヤマンバはすっくと立ち玄関にゆっくり向かった。

七実は、（ああ、腰くらいでよかった！）と心から思った。そして、（下がやわらかい地面だったからほんとうによかった。それにしても、ヤマンバは力持ち。あんなに大きい里枝ちゃんを軽々しょって…）と安心するやら感心するやらしてヤマンバの後につづいた。

家に入り、ヤマンバは里枝を茶の間にそっと下ろすなり、七実に命令した。

「腰をしっぷするよ。土間に里芋が袋に入っているから、十こくらい洗って皮をむいておくれ」

「はい」

七実は救急車をよばないでいいのかなと思ったが、ヤマンバの家にはケータイはもちろん電話すらないようだ。（まあ、里枝ちゃんは命にべつじょうないようだからいいか…）と思いながら、土間に急いだ。ヤマンバはたんすから「さらし」とか「三角巾」などを取り出している。

七実はすぐ里芋を見つけ手づかみで持って台所へ行った。流しで土を洗い落とし、包丁を見つけ皮をむき始めた。七実はこのごろかんたんな味噌汁くらいは作るようになったが、皮むきはまだ得意ではない。一つむくのにもたもたしていると、ヤマンバがやってきて残りをあっという間にむき終えた。そして、もう一度里芋を洗ってすり鉢にすりおろしながら七実に言った。

「畑の大根の畝のとなりに、ショウガが生えているから一株ぬいて、外流しで洗ってきておくれ」

「はい！」

ショウガはすぐ見つかった。葉や茎はもう茶色に枯れかけている。その根元をほると、黄土色のしっかりした地下茎が出てきた。七実はそれを素手で土ごとつかんでぐいと持ち上げた。太い根っこが何本もついていてすごく滋養のありそうなショウガだ。

七実は急いでそれを外流しで土を洗い流してヤマンバのところへ持っていった。ヤマンバはそれもゴリゴリおろした。終わるなり、小麦粉もすり鉢に入れて混ぜてこねた。ほんのり山吹色の里芋パスタができあがった。うまそうでもある。

それを里枝のところへ持っていき、さらしにたっぷりぬり始めた。

「こいつは打ち身によくきくんじゃ」

「ひえ〜」

里枝は顔をしかめている。七実は里枝に聞いた。

「こし、すごくいたい？」

里枝は笑い顔をつくって言った。

「ちょっとね」

七実には里枝がやせがまんしているように見えた。

「頭はほんとうになんともないの？」

里枝は首をコキコキいわせてまわした。

「ちょっと首すじがいたいかな」

「吐きたくないかい？」

ヤマンバが聞いた。里枝は首をふった。

「今晩少しでも吐いたら父ちゃんに言うんだぞ。頭の障害はあとで出てくるからな」

ヤマンバは里芋パスタを平らにならしながら言った。

「それじゃあ、打ったところを出しなさい」

里枝はうつぶせになり、すなおにズボンとパンツをずり下げた。左の腰が赤くはれ始めている。ヤマンバはぐいと里枝

のパンツを思い切り下げ、そこにまず、ごま油をぬってから、たっぷり里芋パスタのついたさらしをおいた。

「つめたい！」

「サトイモは熱と痛みを取ってくれるからな」

と言いながら、ヤマンバは器用にさらしをぐるぐる巻き、その上に大きな三角巾をかぶせてしばった。里枝は、「いてて…」と顔をしかめながら、されるままになっている。

応急手当が終わると、ヤマンバは里枝をリヤカーに乗せた。

「さあて、あんたの家までドライブじゃ」

里枝の家まで歩いて三十分。登りや下り坂があるが、小型トラックが通れる道だ。ヤマンバが七実にリヤカーを指さし、

「あんた、引いてみろ」

と言った。七実はおどろいた。家のからっぽのリヤカーをいたずらで引っぱったことはあるが、けが人を乗せて山道を引けるだろうか。七実の不安そうな顔を見て、ヤマンバが言った。

「こういうのが本当の修行なんだぞ。力がつく」

そう言われて、七実は（よし！）と思った。（いつも里枝ちゃんに助けてもらっているのだから、たまにはあたしがお返ししなくちゃあ）

七実はリヤカーの柄を持ち上げた。そして、緊張しながら進み始めた。まだ始めだから重いというほどではないが、しっかりかじを取って道から外れないようにしなくては。後ろにたのもしいヤマンバがついているから、不安はないが。

山道を登ったり下ったりして、一時間近くかかってやっと里枝の家に着いた。

七実の足はもう丸太ん棒みたいに重かった。手も腕もかたまってしまっている。とちゅう三回休んだ。その度ヤマンバが、「代わろうか？」と言ってくれたが、七実は首をふった。お父さんがリヤカーにつかまったまま崖から転落しそうになったことを思い出し、（力をつけなくちゃあ！）とがんばった。また、リヤカーに乗っている里枝が、

「七実ちゃん、やるねえ。すごいよ！」

と何回もほめてくれるので、とにかくふんばった。里枝にほめられるのも初めてだったのだ。

里枝の家では、父ちゃんと母ちゃんが大根干しをしていた。ヤマンバやリヤカーに乗った里枝を見て、おどろいて近よってきた。ヤマンバが頭を下げた。

「もうしわけない。娘さんにけがさせてしまって」

母ちゃんが里枝に聞いた。

「お前、またおてんば、やったんだろう」

里枝はうなずいて小さな声で言った。

「屋根の上で草集めして、落ちちゃった」

「ええっ！」

母ちゃんはおどろいてヤマンバの方を見た。ヤマンバはもう一度頭を下げて言った。

「腰を打ってるで。サトイモしっぷをしておいたが、見ておくんなさい」

母ちゃんは心配そうに里枝の頭や手足を調べている。

「頭を打っていないかい？」

里枝が首をふると、母ちゃんは、

「それにしても、子どもを屋根に上げるなんて無茶だよ」

と、ぶつくさ言い始めた。すると、里枝は大きな声で言った。

「わたしがかってに登ったの！　屋根はあぶないからだめとしかられたのに」

父ちゃんは、やっぱりという顔でヤマンバに頭を下げた。

「しつけの悪い娘ですみません。こいつは本当におっちょこちょいで」

そして、母ちゃんにも合図した。すると、母ちゃんも照れくさそうに頭を下げた。

「こちらこそ、早とちりしてすみませんでしたね。迷惑をかけたのはこっちだったのに」

ヤマンバの顔が晴れやかになった。七実もほっとした。

帰り道は、ヤマンバがリヤカーを引いた。

ヤマンバは満足そうなおだやかな顔で足取り軽く進んでいく。七実はつかれきってやっとついていく感じだった。

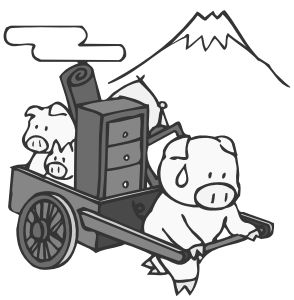
分かれ道でヤマンバが言った。

「きょうみたいのが本当の修行というんだ。お前さんはなかなか見どころがあるぞ」

そんなふうに言われて七実は急に元気が出てきた。

（きょうは里枝ちゃんにもほめられたし！）

七実は家につづく山道をぴょんぴょんはずむようにして帰った。（つづく）



パンドラの箱 第二部

藤川博樹

第二章　アルバイトの早船君が交通事故を起こすこと

常三が樽井書房に移籍してから一月ほどして、さすがにもっと広いところに引っ越そうということになった。トイレの中にまで本が積み上げてあるので、いったい何の本が在庫しているのか誰にもわからないのである。本を広げて在庫を確認しようにも場所が無く、預り先の各々の出版社への支払いはヤマカンである。年末の棚卸しでは、当然大赤字で、これが本当に赤字なのか本の在庫が数えられないから出た帳簿上の赤字なのか誰にもわからなかった。確かなのは、一千万単位の赤字を聞かされて、樽井社長の目つきがあやしくなってきたことだけであった。樽井社長は決算で赤字が出るたびにもう会社はやめようと言った。あとは、おれ一人で少しずつ借金を返していくと。しかし、走り出した船をもとに戻すこともなかなかできないもので、会社は続いていた。

常三が前にいた会社の星野社長は以前虫プロ倒産のおり再建にかかわった縁があり、富士見台の虫プロの第二スタジオの二階が空いていると紹介してくれた。通称2スタの二階は、虫プロの全盛時、二百人の社員やスタッフが組合の大会を開いたという大きなスタジオである。今は、当時の机や椅子、作業台、ポスターカラーや長椅子などが雑然とうずたかく積み上げられた荒廃した倉庫のようだった。その一角を大工に頼んで板壁で囲い事務所とした。がらくたの山の中からかつて原稿やシナリオ、セル画などをの整理に使っていた木の棚を抜き出してきて本棚として並べた。がらくたの山の中をあさっていると、かつての虫プロ時代の社長手塚治虫名義の銀行通帳などが出てきた。

そして、引っ越しが始まった。

知り合いの出版社の息子の早船君がバイトでやってきた。杉並区の宮前から練馬区の富士見台までワゴン社のピストン輸送でひたすら本の山を運び続ける。樽井社長もモッ君もいそがしくて会社にいないことが多く、運搬はもっぱらアルバイトの早船君にまかせたので、一月近くも続いた。早船君はまだ二十歳そこそこの若さで、今日はどこまで進んだと聞くと、「おおむね終わりました」と答える。いつもセリフの冒頭に「おおむね」をつける癖があった。

常三が富士見台の虫プロの二階でひたすら本を段ボール箱から出して棚に並べていると、早船君が交通事故を起こしたという連絡が入ってきた。

動揺した早船君は、その日はもう家に返したという。交通事故の被害者の男性は、早船君や会社にいちゃもんをつけているらしい。翌朝、早船君が出てくる前に皆で事故の噂話をしていると、はたして被害者から電話がかかってきた。

社長の樽井さんは「よし、おれが話をつける」と、はりきって電話に出た。モッ君が、さっそく設置したばかりの留守番電話の録音テープのスイッチを入れる。

金を払えとくどくど訴え続ける被害者。思わずしかりつける樽井社長。

被害者はまだ病院に診療代をはらっていないので、診断書が取れないのだ。電話の向こうの被害者は、声の感じから常三にはなんとなく黒ぶちの眼鏡をかけた初老の小柄の愚痴っぽい男の姿が想像される。

「あなたね、何か間違っていらっしゃいませんか？　診断書を届けないと訴えになりませんでしょ」と樽井社長。

「診断書はただで取れるわけじゃないでしょ、あんた。金をもらわないと診断書もらいにいけないよ。病院の方にお金を払ってもらわないと…」

「こちらはそんなことする必要ないんじゃないですか。診断書は訴えるための手段でしょ。あなたは診断書を警察に届けなくちゃいけないわけですね。それを、こちらが警察に診断書を持って行って、わたしこの人に訴えられてしょうがありませんからって持っていくって、そんなバカ

なことしなきゃいけないわけですか。そうじゃないでしょ」

「あ、そうなの」と樽井社長に指摘されて電話の男は本当にびっくりしたようである。

「あなたが警察に診断書持って行って、こういう被害受けましたと訴えるわけでしょ」

「診断書ただで取れるわけじゃないでしょ、あんた」

「診断書はあなたが訴えるための手段なんでしょ」

「手段じゃないよ、腰も痛いの我慢してるんだ」

「腰が痛いなんて、あなた最初おっしゃらなかったでしょ。指が痛いと」

「指も痛いけど、腰も痛いですよ後から。医者に聞いてごらんなさいよ。ちゃんとレントゲンもとってあるから」

「これは何もあなたと私とで解決できない問題ですねもう。第三者の仲裁の手段をとらないといけない問題ですね。あなたの手段として警察に行って、こういう被害を受けましたと言って初めて成立するわけで」

「わたしの方は、さっさと慰謝料もらえばいいんだよ」

「それは慰謝料じゃなくて治療費でしょ。慰謝料というのはあなたが精神的に傷んだという事で民事によってお払いするお金ですね。それはあなたがこっちにだらだら文句を言って納得できるような問題ではないわけですよ。こちらは何もお金を持ってあなたが訴えるための診断書を取りに行く事はないんじゃないですか」

樽井社長は、最初相手はたちの悪い「当たり屋」だと思っているから、慰謝料をだまし取られない様に必死になっていた。

「あなた人を傷めておいて、一銭も払いませんていうの」と突っ込んでくる電話の男。

「そんなことはいいませんよ。こちらとしてはあなたの診断書を添えまして、わたしどもで二万三千何百円揃えて、こういうことでわたしは訴えられましたって警察に言いに行くんですか？　それはおかしいでしょ」

「それじゃあなた払ってくれるの？二万三千なにがし病院に持って行って……」

「本人に払わせます、それは」

「本人が払うのは当然でしょ」

「それは民事ですよね。民事の裁判をしなくちゃいけませんね。その裁判が成立するためにはまずあなたが警察に訴えなくちゃいけませんね。警察に訴えるためには、まず診断書が必要ですね。警察としてはあなたに訴えるために診断書を提出しなさいということになったんでしょ」

「こっちは怪我させられておいて、あんたに不愉快な事いわれたくないよ」

「あなたが（いちゃもんつけて）こっちをいじめようとしているんでしょ」

「甲乙跋、甲乙跋と」

「甲乙跋、甲乙跋って何ですか」

「逃げの言葉で言ってますね、なんかいうとね。電話代だって高いのに。都合のいいことばっかり言って逃げてるね。諦めさせるようなものの言い方だね。もっと誠意持ってやってくれたっていいじゃないか」

「だってあなたは、こっちの話に乗らないじゃないですか。あなたは、こっちの会社に文句つけて慰謝料もらおうとケチな根性起こす前に、まず本人にけじめつけるようにいうべきでしょ。あなたは正当に訴える権利はお持ちなんですよ」

「あきれたもんだ、とにかく慰謝料だけはもらいますからね。たとえ少しでもね」

「ええだから、値段は裁判できめましょう。あなたそういう請求出されるんでしょ」

「あんたが事故起こしたわけじゃないんだから、あんたが弁明する必要ないの。本人の弁明をききたかったんですよ」

「弁明なんて一言も弁明していませんよ。それじゃ、本人は今日は来ておりませんわ」

「人をあれしたら、少しは人情あってほしいって本人に言っておいてね。それであんたがたは世の中生きて行けるんだから、それでいいんでしょ。人をあやめておいて」

「あやめるっていうのは殺すっていう意味ですよ」

「あやめたも同じじゃない。たまたま生きてたからいいんでしょ。何かというと人の揚げ足とることじょうずだね。盲点付いて人を怒らせて」

「話し合いに乗ろうとしないのに、話し合いをしても意味ないですね」

「だいたい、人と折り合いつけようとしないんですよ、あなたたちは。こちらは怒っているんですよ」

（以下次号）

信州4日間の旅（前）

津村怜奈

「信州４日間の旅」と言っても、私にとってこの４日間は旅というより鍛錬遠足になったかもしれない。初めの２日間は八ヶ岳を登り、３日目から下山を開始して、その夕方から翌日にかけて某大学のＫ教授のお宅に泊まらせて頂くといった流れである。

初日。「わたしの大学生活」を連載している、ふじみ　ちよさんと、「ふみの会」の編集者であり投稿者でもあり、そして私とふじみさんの高校時代の恩師である中井　豊先生と共に早朝、新大阪から八ヶ岳がそびえ立つ長野県、富士見町に向けて、自分たちの頭をも超える巨大なザックを背負って新幹線に乗り込んだ。

新幹線で名古屋まで行き、次に中央本線・しなの３号に乗り換え、塩尻に着くと中央本線で富士見へと向かう。新幹線の中では全く遠足気分になれず、これからあの約２９００メートルもの八ヶ岳を登ることを考えると期待ではなく、不安ばかりが募り、先生が車窓から見える山々を説明してくださっているのも右から左で、一人、外の風景をボーっと眺めて気を紛らわせていた。

富士見駅のホームに着くと駅の外側から３人の方々がこちらに手を振っている。これから共に八ヶ岳登山をする中井先生のご友人のＳご夫妻、そして３日目よりお邪魔するＫ教授の奥様だった。お三方はわざわざ富士見駅まで私たちを出迎えてくれたのだ。昼ご飯に八ヶ岳の麓で信州名物のおいしいお蕎麦を食べ、楽しいお喋りをしていると、しだいに不安も消え、「登ってやるぞ！！」とメラメラしていた。……が、これが登山の経験が少ない私にとって落とし穴になることになる。

Ｋ教授の奥様とは登山口で別れ、中井先生とＳご夫妻、ふじみさんと５人で美濃戸口より出発し、私は先頭を切ってズンズン進んでいく。「なんだ、結構いけるかも。予定では３時間でキャンプ場に着くみたいだし、知らぬ間に着きそう。」そう思って登っていたのもつかの間、１時間くらい経つとへたってきて、一緒に登山していたご夫婦に追い越されていった。ここからはもう地獄。歩いても歩いても先に行ったご夫婦は見えてこない。中井先生は私とふじみさんの後ろから「頑張れ、頑張れ」と遅い私たちに声をかけて後に付いてくださった。初めの方は周りの景色を見ながら登っていたが、予定の３時間になってもキャンプ場は全く見えてこなく、キャンプ場がある気配すらなく、ただ、自分が歩いている足下しか見ずに無我夢中に登っていた。その間、先生やふじみさんが「頑張ろう！　あともう少しや！」と言ってくださった言葉が何よりも励みになった。

そして登り初めて４時間。ようやくキャンプ場が見えてきて、先に到着していたＳ夫人が遅い私たちを心配して入り口のところで待っていてくださっていた。あの時はもう嬉しくてふじみさんと私は夫人に飛びついていた。「さぁ、一息つこうかな。」と思ったが、すでに17時過ぎだったので、他の登山者は着々と夕飯の支度をしていたり、就寝の用意をしていて、私たちは急いでテントを組み立てた。テントを立て終えると女性３人組は温泉に入りに行くことにした。温泉と言っても、山の中なのでシャンプーも石けんも使えない。ただタオルで体を擦って湯船に浸かるだけ。でも、アツアツのお風呂に入った時はとても気持ちよくて、体の芯まで温まり、その日の疲れがとれていくような気がした。つい長風呂をしポカポカになって出てきたが外はもう真っ暗で冷え込んでいる。

私とふじみさんは急いでテントに戻ると先にお風呂を出たＳ夫人と、Ｓさん、そして中井先生がすでに夕飯のすき焼きを作って私たちを待っていてくださっていた！　まさに据え膳。先生たちの料理を作る手際良さにも驚いた。18時半。周りの登山者たちはすでにテントに入り明日に備えて眠っているようだ。しかし、ここからが楽しみにしてきたすき焼きパーティーの始まり。パーティーと言ってもただ食べるだけなのだが、苦労して登った山でみんなで食べるすき焼きは最高！！　キャンプ用のコンパクトサイズの鍋をみんなでつ

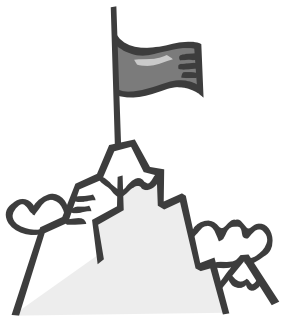
っついて、ガッツリ食べた。そして、20時、片付けを済ませると私たちも明日に備え、床に就いた。

が、キャンプ場と言っても標高２０００ｍをゆうに超えているので夜は冷え込んで、シュラフだけでは寒くて眠れない。そのうち冷えてきてトイレに行きたくなってきた。「あぁ、面倒だな。」と思いながら真っ暗なテントの中から手探りで外にでると、今まで見たこともない美しいものが私を覆っていた。満天の星空だ。空がまるでキャンパスのようで、そこに天の川、夏の大三角形が描かれ、そしてそれらの周りを埋め尽くすように小さい星たちがひしめきあっていた。私は言葉を見失った。こんなきれいな光景が存在するんだ……少しの間、ただ黙ってその巨大な絵に見入っていた。とても神秘的な夜だった。

２日目。起床５時。隣に立っていたテントも、他のテントも片付けられていた。すでに他の登山者たちは下山なりさらに上へと出発したようだった。我々も朝食を済ませ、６時半にキャンプ場を出発した。これから行くルートはこんな感じだ。まず、昨夜宿泊したキャンプ場を拠点に重い荷物はテントの中に置いていき、山頂で食べる昼食と水をリュックに詰め、キャンプ場からさらに標高２７６０ｍの硫黄岳の山頂を目指す。そして、そこから横岳を縦走して、最後に八ヶ岳の最高峰である赤岳の山頂に到達するといった具合だ。この日は、前日の反省を生かして、登り初めからペースを落として歩いていったので周りの景色や草花、鳥のさえずりを楽しみながら登れた。しかし７時頃になるとしだいに陽が昇り暑くなってきて、息が荒くなってきた。２時間ほど登っていると漸く硫黄岳の山頂が見えてきた。ここで私はあることに気づいてきた。八ヶ岳は私が今まで登ってきた山と全く違う、と。見たこともない高山植物たち（高山植物の女王と呼ばれるコマクサも見ることができた）が生息している。周りを見渡せば山々が足下に広がっている。スケールが違う。１枚の写真には収めきれないほどの山々が私の周りに連なっているのだ。空がとても近く感じた。

硫黄岳の山頂に着くと、とりあえず休憩をし記念撮影をした。今日は天候にも恵まれ、景色も良くて、みんな楽しそうだった。これからはそれぞれの山頂を縦走して行くだけなので楽かもしれないと思っていたが、実は山の上ほど恐ろしいものはないのだと実感した。標高２８００ｍ地点で幅１ｍもないところを歩かなければならないところもある。もちろん下は崖っぷちである。おまけに雲がかかってきて下が全く見えない状態である。先生が冗談まじりに「ここから落ちたらイチコロだな」とおっしゃった言葉はとうてい冗談に聞こえず、本当に恐ろしかった。崖をよじ登って行くところもある。鎖が付けられているものの、足がすくんでしまった。どうにかして横岳を通過し、最高峰の赤岳の近くまでたどり着いた。もうすでに13時になっていた。ここでランチタイムだ。キャンプ場より持ってきたパンとスープを食べ、先生が山頂に持って行くよう勧めてくださったリンゴをみんなで食べた。汗をかきながら、リンゴをほおばった時は最高に気持ち良かった。そんな幸せを教えてくださった先生に感謝！！

昼食を済ませるとラストスパートの赤岳の山頂を目指して、鎖を持ちながら一歩一歩登っていった。途中雨が降ってきて、足場が悪くなってきたが、山頂はもう間近だったので力を振り絞って登っていった。そしてついに山頂！！　私はふじみさんと共に手を取り合って共に頂上に足をおろした。今までの辛さ、恐怖を乗り切った自分たちを讃えるにふじみさんに抱きついた。そして、私たちは記念撮影をし、しばらく雲がかかった山々を見ていた。ふと横を見ると今まで共に険しい道を登ってきたふじみさんがいて先生がいてご夫婦がいる。そして、みんなで同じ景色を見ている。そう思うと、安堵した。



混沌市凡日録　４０

テイク・ザ・マニー&ラン

蒲原直樹

「もっとでかい仕事しなきゃダメよ」

女房の毬絵の返事に次郎は耳を疑った。

渾沌市鼠山のアパート木鼠荘に住む派遣社員・泉谷次郎は、十余三（とよさん）工業団地の派遣先工場から『アメリカの証券破綻で親会社がコケた』という理由で突然解雇され、以来半年仕事がなかった。女房にそれを告白できず、毎日弁当を下げてうちを出るものの行くところがなかった。混沌駅前のパートバンクや杉戸のハローワークに行ってもめぼしい仕事はなく、毎日公園で弁当を食べて帰宅していた。そのうち給料日になり、絶対に現金を持って帰らなければならない彼は、公園の裏にあった民家に侵入し、手提げ金庫を盗みだした。金庫には二〇万円近い現金が入っており、次郎は窮地を脱することができた。

それ以後、一週間に一度くらいの頻度で次郎は窃盗を行って生活費を稼いでいた。彼の手口は派遣先で使っていた作業服と黄色い安全ヘルメットを着用し、電気工事のように見せかけて電信柱を登り、留守とにらんだ家の二階に入り込むのだ。中高生時代に器械体操をやっていた次郎には電柱登りやそこからの跳躍はお手の物だった。二階の窓は多くの場合施錠されておらず、次郎は容易に窓から侵入できた。

最初の時の手提げ金庫のような大物はめったに見つからず、多くの場合現金は数千円からせいぜい数万円が手に入るだけだった。その代りにゲーム機やパソコンなど金目のものを見つけて、それを適当に売り払うことが多かった。数ヶ月間はそれで過ごすことができた。

半年後、侵入した民家に住民がいた。枯れ木のような老婆だったが、次郎が二階の窓から四畳半の部屋へ入ると、

「ドロボー、ドロボー！」

と叫び、杖で彼を殴った。次郎はあわてて窓から電信柱に飛び移ろうとして失敗し、半回転して地面に叩きつけられた。幸い骨折もせずはいずって逃げたのだが、下半身を打って歩行に困難をきたし、窃盗稼業は中断した。その間にも給料日はやってきて、次郎はいよいよ毬絵に本当のことを白状しなければならなくなった。そして仔細を告げたときの毬絵の答えが冒頭の言葉だった。

「そんなちまちました泥棒したって追いつかないじゃない、ドーンと儲かる仕事をしなさいよ」

「そんな、おまえ……」

次郎が驚いていると、根が体育会系の毬絵は激しく付け加えた。

「だって、来年生まれる子どものためにまとまったお金がいるんだから。公共料金や食料品もどんどん上がってるし、ハンパな金じゃどうしようもないよ」

次郎の顔が歪んだ。

「ほんとうか？……子どもって？」

「今日、病院でわかったの。二か月だって」

それを聞いたとたん、次郎は喜びで腰の痛みが吹き飛んだ。

彼らはそれから「大仕事」の計画を練った。銀行や郵便局は警戒が厳しく、コンビニや商店はたいした稼ぎになりそうになかった。毬絵が考えたのは「宗教」だった。

「宗教団体ってお金持ってるよね？……使い道のない大金抱えて困ってるんでしょ、それ貰ってあげようよ。象価学会なんて、札束の詰まった金庫をゴミに捨てて話題になったじゃない？」

「そうだけど、あれから象価学会も少しは用心してるらしいよ」

「原理教は？」

「最近、もめていてお金が集まらないんだって」

そうやって話していく中で二人は最初の目標を渾沌市の隣りの野駄目市にある「霊光の波」教団に決めた。それは、

「がめつくてせこくてダサイけど、ボーっとしててヌルそう」だと毬絵が言ったからだ。知り合いの信者や時々駅前で宣伝している信者たちの印象からそう感じたらしい。それに霊光の波中央本部のある場所は、次郎の勤務していた十余三（とよさん）工業団地にほど近く、彼には土地勘があった。

目標が決まったのでさっそく彼らは霊光の波に関する情報を集めた。闇雲に盗みに入るのではなく金の集まる節目を狙う必要がある。霊光の波教団の「大祭日」はいくつかあったが、その年の秋に「教会設立半世紀」の大祭が予定されていた。霊光の波が杉戸に最初の教会を作ってから五〇年たつというのだ。彼らはこの祭りに狙いを定めた。さらに姫路城を模したという超キッチュな「天守閣」をはじめ、悪趣味な多くの建物を有する教団中央本部の中で、どこに金が集まるのかを見極める必要があった。彼らはそれをパルテノン神殿式の柱に取り囲まれた「総教司団本部」と推測した。さらにその建物の構造、通路や入口、人の配置などを研究した。建物はそれなりにセキュリティを施してあり、カメラや警報機が取り付けてあるだけでなくガードマンが常に周囲を警戒し、定期的に巡回していた。いかに「ぬるい」教団でも、金に関しては厳しいところがありそうだ。二人は頭をひねった。しかしたいした知恵が出るはずもなく、出たとこ勝負でやるしかなかった。

霊光の波教団の教会設立半世紀記念大祭の当日になった。野々田線雲海駅は人ごみでごったがえし、一六号線は車があふれた。次郎と毬絵は事前に盗んだ原チャリスクーターを裏門近くに停め、人ごみにまぎれて中央本部に入り込んだ。そして繁みの蔭に潜み、総教司団本部の裏口を見張った。表の喧噪がおさまり夕暮れが近づいた頃、裏口から大きな袋を下げたガードマンと一人の女性職員が出てきた。二人は口も利かず、少し緊張した面持ちで足早に中央広場を横切って行く。行く先は物品販売棟に並設してある三菱ＵＦＪ銀行のキャッシュコーナーらしい。

「あれだ！」「うん」

次郎は短く切ったストッキングを頭からかぶり、懐から振り出し警棒を引っ張り出して右手に構えた。その手がブルブル震えている。走り出そうとするが足が動かない。打撲した腰がまた急に痛み出した。

「なにやってんの、あんた！」

毬絵が苛立つ。そして次郎の警棒をひったくると一人で広場へ駈け出した。「あっ……」次郎は驚いてヨロヨロと立ち上がり、女房の後を追った。

毬絵は怒涛の如く走って袋を提げたガードマンのそばに駆け寄ると、裂帛の気合とともに彼の後頭部に振り出し警棒を叩きつけた。毬絵は元剣道部の有段者なのだ。ガードマンは一たまりもなく地面に倒れ伏した。毬絵はガードマンの手から袋をひったくり、背中に担いで裏門へ走った。女性職員が甲高い悲鳴を上げた。広場のそこここにいた信者たちがこちらを振り向く。次郎は精一杯の速度で毬絵を追いかけるがなかなか追いつかない。後方では女性職員がトランシーバーで何かを連絡している。すると物品販売棟と総教司団本部からばらばらとガードマンたちが駈け出して来た。

（ちくしょう）気持は焦るが足が言うことを聞かない。次郎がやっと毬絵に追い付いたかと思うと、裏門から二人のガードマンが現れた。彼らは警棒を引き抜き、通せんぼをした。

「停まれ！」

「凶器を置け、抵抗するな！」

彼らはそう叫び、片方のガードマンが笛を取り出し、ピリピリピリと吹き鳴らした。後方からはガードマンの群れが迫った。万事休すだ。

その時、裏門の外からプラカードを抱えた数人の男女があらわれた。

「インチキ、カルト教団は解散しろーーッ」

「被害者に謝罪し、献金を返還せよーーッ」

彼らが叫ぶと、その後ろから同じスローガンを叫びながら数十人の男女が押し寄せた。裏門のガードマンたちはたじろいだ。

「入っちゃいかん、住居不法侵入だぞ！」

「団体交渉するならちゃんと手続きしろ！」

裏門のガードマンたちはそう言いながらデモ隊を阻止しようとしたが、たちまち蹴散らされた。広場を駆けてくるガードマンたちも、目標を次郎と毬絵からデモ隊に変えたようだ。二人はその隙間をぬって表に駆け出し、次郎が原チャリを運転し、後ろに袋を背負った毬絵がつかまり、二人乗りして走りだした。後方の乱闘騒ぎが遠ざかり、裏道を抜けて畑のある通りを走る頃、次郎にやっと「現金ゲット」の実感がわいてきた。彼の頭の隅で、スティーブ・ミラー・バンドのリバイバルヒット曲『Take the money and run（ゼニ獲って逃げろ）』が鳴り響いた。

八ヶ岳

中井　豊

北アルプスの山々の標高は概ね二七〇〇ｍから三〇〇〇ｍであり、穂高岳（三一九〇ｍ）、槍ヶ岳（三一八〇ｍ）、劔岳（二九九八ｍ）などを擁する。最高峰で比べると、中央アルプスでは御嶽山（三〇六三ｍ）、八ヶ岳では赤岳（二八九九ｍ）だから、いずれも北アルプスに遜色ない。しかし、北アルプスの広がりは「面」になっていて、例えば三俣蓮華や黒部渓谷に入ると幾重もの高山が下界を遮り、深い山懐に抱かれる魅力がある。中央アルプスや八ヶ岳は稜線が文字通り「線」となって南北に伸び、頂上から集落が見えてしまう。それで余り登ってこなかった。

八ヶ岳に初めて登ったのは一九九三年の夏だった。妻・義母・次女・三女を連れて登った。この時は中央本線の塩尻で特急「あずさ」に乗り換え、小淵沢駅で下車。タクシーで観音平まで行き、ここから編笠山（二五二三ｍ）を目指して歩き始めた。六甲全山縦走が自慢の義母は嬉々としていた。編笠山は頂上が近づくと急な登りが続く。薄暗くなって頂上に着き、青年小屋キャンプ場にテントを張ると、辺りはすっかり暗くなっていた。ヘッドランプで「乙女の水」を探し当て、米が炊けたのは二〇時を回っていた。高校生と中学生だった娘達は、疲れて夕食をほとんど口にしなかったように思う。

翌日は少なくともキレット小屋キャンプ場まで行きたかったが、権現小屋で昼食にして出発した後、霧雨の中で道を間違え、引き返して権現小屋に泊まることになった。一人で小屋番をしている男は、「今朝、足を痛めた六〇キロの人を背負って山を下りたので少し仮眠させて下さい」と言った。出された夕食に彼が山で採ったキノコの入ったスープがあって、これは美味しかった。彼は「山の遭難で友人を三人亡くし、山は止した」とも語った。夜中に外のトイレに出ると月明かりの中で赤岳から伸びる急な釣り尾根が幻想的だった。

三日目の朝はガスの中だった。権現岳頂上（二七一五ｍ）まで見送りに出た小屋番が背後で吹いてくれたオカリナの音は心にしみた。この日はずっと小雨であった。広い登山路の脇に貴重なコマクサの群落を見付けることもできたが、鎖の設置された断崖を強い風に吹きとばされそうになりながら行く娘達の姿が危うく見えた。キレット小屋を過ぎると、赤岳頂上への最後の長い急登になる。ガスに遮られて視野が狭く、雨で身体が冷える。山の険しさと天候に、七〇歳近い義母はすっかり意気消沈し、無言になって歩いていた。台風が来ているというので、この日も予定を変更して、赤岳頂上小屋に泊まった。

四日目は義母の疲労を考え、文三郎尾根を下山して赤岳鉱泉キャンプ場でテントを張ることにした。下るに連れ、辺りは穏やかになる。赤岳鉱泉キャンプ場に隣接する山小屋には温泉がある。鉱泉をボイラーで沸かしているのだが、雨の中を下山した後には最高の施設だ。

五日目は快晴になったので、私は娘達だけ伴って阿弥陀岳（二八〇五ｍ）を往復することにした。なかなか険しい岩場の上り下りだったが、高度感のあるこの山に登頂した後、富士山を眺めながら穏やかな中岳を経て前日と同じ道に出た。テント場まで戻ると妻と義母が昼食におにぎりを作って待っていた。食事を済ませてから、テントを撤収し、北沢に沿って美濃戸口へ。ここからバスで茅野駅に行き、電車で帰阪した。

二度目の八ヶ岳は、数学の南賢一さんと二人で登った。二〇〇〇年の夏休みだった。彼の運転する車で中央自動車道を走り、初日は松原湖のキャンプ場で一泊した。

翌日、稲子牧場入口、本沢入口を経て、「ゲート」に車を置いて入山した。本沢温泉キャンプ場でテントを張って昼食し、ひと休みした後、デイパックで夏沢峠から根古岳（二六〇三ｍ）、東天狗岳に至り、西天狗岳頂上（二六四五ｍ）までの間を往復した。帰りは東天狗岳直下の道を本沢温泉まで下り、湯川源流に位置する露天風呂に浸かった。湯川は千曲川、信濃川となって日本海に注ぐ。

この旅行では、三日目に前橋市へ寄り、関越自動車道を通って秋山郷でキャンプ。四日目は小赤沢コースから苗場山（二一四五ｍ）を往復し、さらに志賀高原で一泊。最後に、信濃大町の湯俣温泉でキャンプした。

ずっと天気に恵まれた山と温泉の五泊六日だった。

今年の夏、八年振りに八ヶ岳登山の機会を得た。かつて高校で数学を教えた大学生二名を山に案内しようとして選んだのである。二人は女子である上に、初めて三〇〇〇ｍ級の山に挑戦することになるので、全員未踏の充実したコースとして、赤岳鉱泉にテントを張り、ここをベースに硫黄岳（二七六〇ｍ）、横岳（二八二九ｍ）、赤岳を一日で縦走するという無理のない二泊三日の計画を立てた。私の体力の衰えも考えに入れてのことである。嶋倉完治さん夫妻も参加してくれることになった。夫妻とは三年前に中央アルプスの空木岳へ登って以来である。

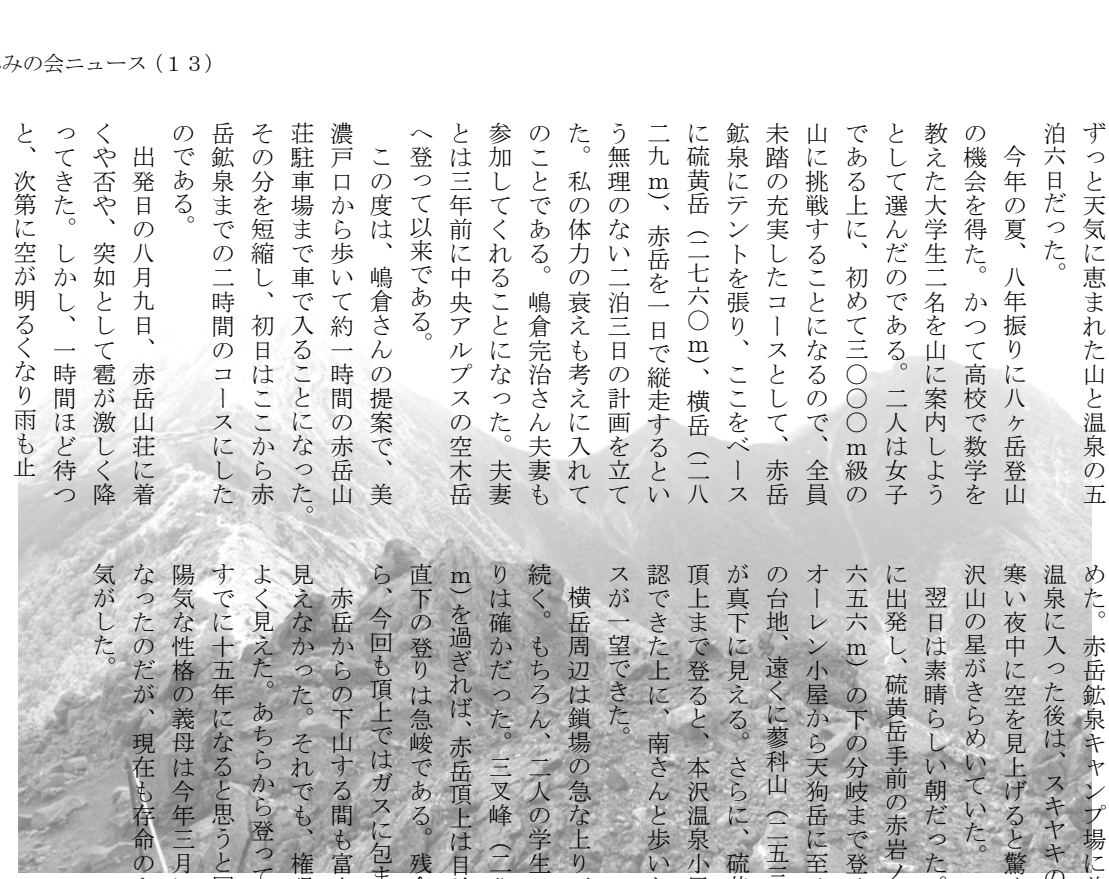
この度は、嶋倉さんの提案で、美濃戸口から歩いて約一時間の赤岳山荘駐車場まで車で入ることになった。その分を短縮し、初日はここから赤岳鉱泉までの二時間のコースにしたのである。

出発日の八月九日、赤岳山荘に着くや否や、突如として雹が激しく降ってきた。しかし、一時間ほど待つと、次第に空が明るくなり雨も止んだので、ザックを背負い歩き始めた。赤岳鉱泉キャンプ場に着いて温泉に入った後は、スキヤキの夕食。寒い夜中に空を見上げると驚くほど沢山の星がきらめいていた。

翌日は素晴らしい朝だった。六時に出発し、硫黄岳手前の赤岩ノ頭（二六五六ｍ）の下の分岐まで登ると、オーレン小屋から天狗岳に至る樹林の台地、遠くに蓼科山（二五三〇ｍ）が真下に見える。さらに、硫黄岳の頂上まで登ると、本沢温泉小屋が確認できた上に、南さんと歩いたコースが一望できた。

横岳周辺は鎖場の急な上り下りが続く。もちろん、二人の学生の足どりは確かだった。三叉峰（二八二五ｍ）を過ぎれば、赤岳頂上は目前だ。直下の登りは急峻である。残念ながら、今回も頂上ではガスに包まれた。

赤岳からの下山する間も富士山は見えなかった。それでも、権現岳はよく見えた。あちらから登って以来、すでに十五年になると思うと同時に、陽気な性格の義母は今年三月に亡くなったのだが、現在も存命のような気がした。



（赤岳への縦走路。右は中岳を挟んで阿弥陀岳）

沖縄の思い出 ⑭

多村 喜木子

与那国空港で純子さんや豊田さんに見送ってもらったことまではカラー動画のように覚えているが、伊丹空港に着いてから父の車で自宅に帰ったことや何を話したかなど、そこにスッパリと線が引かれているかのようにパタリと思い出せない。久々に会う両親や自宅に懐かしさや安堵感のようなものがあったはずだが、カラー動画はおろか白黒の静止画でさえ出てこないのだ。与那国島で出会った人たちの名前や会話や表情は十何年経った今でも鮮明に思い出せるというのに。同じ時期の出来事でも興味や楽しさの度合で記憶の深さも違うものだと実感した。

その後の京都での出来事は日常すぎるあまり記憶に刻まれていないということもあるが、私にとって最もつらく逃げ出したい出来事があり、長い間遠ざけるようにしていた記憶を無理やり引っ張り出すのに苦労した。

与那国島での弾むような生活から平凡な自宅の生活に馴染む間もなく三学期が始まった。私を含めクラスの半分ほどはエスカレーター式の大学または短大に進学するため受験とは無縁で、部活を続けている子やバイトに明け暮れている子などそれぞれが悠々自適な高校生活最後の日々を過ごしていた。もう半分のクラスメートは先生になりたい、医者になりたい、もう女子高は嫌だ共学に行きたい、とにかく国公立……など内部進学組の浮かれた雰囲気とは対照的に確固たる意志や情熱を持って受験勉強に勤しんでいる人たちだった。授業と授業の合間の十分休みや昼休みはもちろんのこと、受験に関係のない科目では先生も暗黙の了解の下ほぼ堂々と受験勉強をしていた。そんな彼女たちの真剣な空気がじわじわとクラス内に浸透していき、残り少なくなっていく学校生活への寂しさも感じるようになり、いつの間にか内部進学組も遠慮がちに小声で話すようになり、教室は高校三年生の三学期らしい重苦しい空気に包まれていた。

そんなある日、いつものようにバス停の横にあるコンビニエンスストアで雑誌を立ち読みをし、夕飯までにテレビを見ながら食べるつもりのお菓子を買って自宅に帰ると母の様子がおかしかった。リビングのソファで小さくうずくまるように頭をガックリと下げて座っていた。そしてゆっくりと私を確認すると、呆然とした顔で、

「パパに女の人がいたん、知ってた？」

と思い出したかのように泣きながら責めるようなすがるような声で聞かれた。私は突然のことに意味がわからず、知らなかったと答えるよりも先に今日何があったのかと母に説明を求めた。

母はその日の午後、知らない女から自宅にかかってきた電話で父に愛人がいたことを知ったのだった。「私のこと知ってますか？」から始まった電話の内容は、女が三十三歳の元ホステスで忍という名前ということ。五年前から毎月父に生活費をもらい交際しているということ。父が女の母親に会って離婚して責任を取ると約束していたこと。そうして約束したにもかかわらず一向に別れる気配がないとしびれを切らした女は、母が何も知らずに幸せに暮らしているのかと考えたら腹が立ち自分の存在だけでも知らしめたいと電話をかけてきたのだという。

私が小学校を卒業した頃、父は大学卒業時から勤めていた不動産会社を退職して自宅で不動産会社を起こした。法律から料理まで何でも知っている賢く優しい家族の自慢のパパだった。その後バブル全盛期が来て会社が軌道に乗り、事務所を祇園に移して土地や家を買い値段を高くして売るという地上げ屋と呼ばれる仕事をするようになった。生活は目に見えて派手になり、両親ともにベンツに乗るようになり、お小遣いが増え、誕生日やクリスマスのプレゼントがティファニーのアクセサリーになって、私も学校でお金持ちだと思われていた。そして祇園でクラブまで経営し始めた父は、何かと理由をつけて深夜も出ていくようになり家にいないことが当たり前になっていた。その数年後にバブルが崩壊し、クラブが潰れ、ベンツがなくなり、毎日銀行から取り立ての電話がかかってくるようになり、米を買うお金がないと母が嘆くほど家計が苦しくなった。それでも父が家にいないことだけは変わらなかったが、母は私に生活費を稼ぐために家族に内緒で深夜のアルバイトをしていると思うから、父のプライドのために感謝して黙っていてあげようと言っていた。母と私にとって贅沢を知った後の貧しい生活は惨めだったが、それでも父を信じて尊敬していたのに……。

父に確認することが怖かったのか、ただソファに座っているだけの母の代わりに、まだ制服を着たままの私が父の事務所に電話をかけた。悲しかった気持ちは怒りに変わっており、父に一部始終を説明して責め立てどんな言い訳をするのか聞いてやろうと強い気持ちでいた。すると思いもよらず父は黙って最後まで聞き、

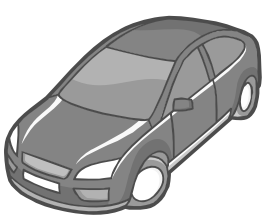
「もう何もかも終わりやし死のうと思ってた」

とだけ言った。ずるい。父は言い訳も許しを乞うこともせず開き直ったのだ。死ぬなんて言われたらこれ以上何も強く言えない。父のしたことは許せないけれど大好きだから死ぬなんて絶対に嫌だ！　私はもう言葉が出てこなくなりここで無理やり母に電話をかわった。

もう父なんか不潔で最低だと思ったが、それでも私が父に言えば女と別れるだろうと心のどこかで自信があった。しかし帰って来た父にはもう私との家族愛などどうでもよく、死にたいなどと白々しいことを言いながら自分と女のことばかり心配していた。そして最後に母がお願いだから本当のことを聞かせて欲しいとあきらめたように聞いた質問で、忍という女への気持ちも離婚も本気だったと白状した。

我が家は子供の頃からずっと弟は母と、私は父と仲が良かった。そんな私だけは父にとって特別な存在だと思っていた気持ちを否定されて、愛人がいたということとは別に心が深く傷付いた。この時から私は父を無視するようになった。

（つづく）



〔エッセイ〕

私の旅

内田幸彦

年に一度か、二年に一度はフラリと出掛ける。自動車が多いが、目的地も能登とか、九州とか大まかな決め方で、列車や旅館も予約せず何もかもその時の気分次第だ。

仮に東北に行ったとしても、何処の何を見ると言う目的がある訳でなく、土地の歴史に興味がある訳でもない。東北全体をなんとなく浮き草のように流れて歩きたい。

それも一人旅だ。家内は私のような無計画な旅は心許なくて行きたくはないとついては来ない。大きな声では言えないが来てくれなくて幸いなのだ。旅は一人に限る。連れがあると宿泊地や、昼食もいちいち相談せねばならないが、一人なら車で寝ようと、気に入った所で二、三日居ようと全くの自由だ。その自由が私には魅力なのだ。

旅館でも食堂でもよく言われる。「あなた一人で寂しくないの？　奥さんか彼女が居るでしょう。遠い所へ一人で来るなんて変わってるわねえ……」と。どうせ話しても理解されないに決まっているから「独身でね」と言って置く。

土産はその土地の石ころ一個と、旅館の宣伝マッチ、パンフレット等で何か書く時の資料にする。何処へ行ってもカメラで気に入ったところを写し、その写真から風景画を描く。いい出会いがあれば紀行文も書くから、旅費は人の三分の一の割安だと思って、その分だけ長く滞在する。

ホテル、旅館も土曜日以外なら何処でも予約せずに泊まれる。時たま土曜日で宿がない時は自動車で寝て、翌日は旅館に泊まったつもりで思い切り旨いものを喰べる事にしている。

旅の楽しみは前夜、明日の予定を立てることだろう。地図から距離と時間を割り出し、宿泊地を決める。泊まった土地は一通り街を見て回り、疑問や興味のある事について土地の人の話を聞く。土地の方言や訛りを聞くのが楽しい。

敢えて言うなら私の旅の楽しみは、土地の人とのふれ合いだろう。話を聞きながらその人の生活、履歴、職業などを想像する。要は人間好きと言う事だろう。

壱岐で乗ったタクシーは女運転手で、主人が外国航路の乗組員だそうだった。年に三月ぐらいしか家にいないと言う。奥さんは遊んでいるのが勿体ないとタクシーで稼いでいるそうだ。明後日は主人の船が横浜港に入るので、車で会いに行くと顔を輝かせていた。前回は神戸まで走って会いに行ったと言う。

『袖すり合うも多生の縁』と言うように、旅先での触れ合いはその時が最後、二度と会う事のない人達だけに心に残る。その場限りの全くの行きずりの人達だと思うと親しさを感じる。

北海遺は広大で過疎の町が多く北海道人は寂しがり屋だと言う。自然、旅行者には親切で人なつっこく接してくれる。

面白い事は、北海道の小さな港には○○駅と書いてある所を時々見かける。○○港、つまり港は別れに繋がり淋しいとされ、○○駅と呼び替えている。そう言えば、流行歌に別れをテーマにしたもの、マドロスもの、港ものが多いのは納得がいくではないか。それに対し、駅は送迎共に賑やかで哀愁は感じられない。もし行かれる機会があれば、この呼び替えに留意されて確かめられては。

なぜか北海道に惹かれ、団体で個人で合計七、八回行っている。そのうち二回は自動車だから延べ日数で五十日以上泊まった計算になる。

二回目の北海道自動車旅行を終わり、小樽から乗船したら、なんと一人旅の男三人が偶然同室になり、意気投合の一夜を過ごした。今も年賀状を出し合っている。一人は鳥羽市の四十歳ぐらいのサラリーマン、一人は和歌山県の御坊市の俳句の先生で、みかん農家の人だ。小樽から舞鶴まで、一人旅の良さを一晩中、礼讃し合った。

三宅島のホテルで、岸和田市北町の金物屋さんの長女だと言う人に会った。あまりの奇遇を信じられず、帰ってからその金物屋さんに釘を買いに行った時、聞いてみたら彼女の話に何一つ嘘はなかった。例えば、難波で待ち合わせしても会えぬ事があるのに、三宅島で岸和田の人と会えるなんて――旅の面白さでなくて何であろう。

一人の出たとこ勝負の、無計画旅行の良さは全くの自由と無計画だからこそ起こるハプニングであろう。

わたしの大学生活（15）

ふじみ ちよ

八ヶ岳に登ってきました（1）

高校時代は、山岳部だった。

本職は天体部だったけど、友達（ふみの会の津村さん）の勧めで山岳部にも入部。俗に言うかけもち。若かった……（笑）

入部当初の顧問の一人に中井先生がいた。何を隠そう、ふみの会の中井豊先生である。先生との出会いは、数学であり山岳でもあった。

その中井先生に今年の夏、八ヶ岳登山のお誘いをいただいたのだ。「君達との約束を果たさなあかん」と。正直なお話、わたしはそんな約束は覚えてないのです。むしろ、しんどい登山はしたくありません。

ところが、どんどん計画が進んでいるようで、長野県におられる先生の友人の方にもお宅に伺うということを連絡されたご様子。8月の9日から12日までの4日間、信州・八ヶ岳を巡る旅が決定した。わたしの夏休みの一大イベントである。メンバーは、津村さんと先生を含めた5名。

先生は、わたしと津村さんのためにも安全面を重視したいとお考えで、新幹線と鉄道を乗り継いで長野・富士見町まで向かうことになった。交通費は高くなるけれどバスを使うよりはいいだろうと。当日は津村さんと二人でJR新大阪まで行き、先生と落ち合う。そこからは新幹線で名古屋へ。特急「しなの」に乗り換えて、塩尻まで津村さんと共に吐き気に耐えつつ向かう。お盆前の車内は混雑していて座れなかった上に、初めてのケーブルカーの揺れに三半規管が対応できなかったのだ。塩尻までの道のりにあった数々の名所をまともに車窓から見る気力もなし。あぁ、登山をする前から疲れてしまったわたしたち。先が思いやられる。

しかし、長野県の空気を吸えばなんとか回復。富士見駅に到着後、登山をご一緒させていただく、中井先生の友人ご夫婦「パパママ」と、そして先生の幼なじみであり現在は富士見に住んでらっしゃる「わかさん」と対面。わかさんのお宅に3日目の夜は泊めていただくのです。皆さん優しそう。これからよろしくお願いします！

3日分の食料を買い出しに行ったあとは、わかさんの案内で信州そば屋さんへ。そこの冷やし鴨南は本当においしくて、そば好きの父にも食べさせてあげたかった……と心底思った。やっぱり本場の味は偉大。

さてさて、いよいよ登山口に向かうわけなのですが、美濃戸口から歩くと1時間ほどかかる山荘までの道を車で連れて行っていただいたという……（笑）パパママはおうちの車で、先生と津村さんとわたしはわかさんの車で。山道がどんどん狭くなってわかさんの車が通れなくなったあともパパママの車に乗せていただいて、山荘までラクラク向かう。わかさんとは途中で、3日目にわかさんのお宅に伺うときまでお別れ。気をつけて登山頑張って来ます！

程なくして到着。駐車場に車を停めて登山準備だ。しかし、ここでまさかの雨……いや、雹だ。8月に雹!? なんて場所だよ長野県。雷もどこかで鳴っているし、山の怖さを出発前から思い知らされる。

このまま中止かなとも思ったけれど、結局雹もそのあとの雨も上がり始め、荷物の準備を着々と進める。わたしはこのときの先生の行動に今でも穏やかながら不満を感じる。山にフルーツは絶対必要だと、わたしの反対を押し切って先生が買ったりんご6つを、先生がわたしのリュックに詰め込んだのだ！ 重たいりんごを6つも!! わたしは拒絶するも認められず、いざ出陣。

このりんごの重さがどこまで響いたのかはわからないが、初日のコースである赤岳鉱泉キャンプ場までの道のりは辛かった。元柔道部のタフな津村さんに着いて行こうと前半は頑張った。でも気がつけば後方にいたパパママに追い越すどころか追い付くこともできない。情けなさすぎる20歳学生。途中の川で休憩をとったあとも、もうなんとなく歩けない。12キロはある荷物を一度下ろして休憩なんかしちゃったらもう歩けない。生まれながらに根性なしのわたしは呼吸だけ激しく、歩は進まない。結局2時間ほどのコースを3時間以上かけて、しかも最後は津村さんに腕を引っ張られる形で、キャンプ場の地に足をつけた。

（つづく）